バス利用 丹波市V字回復

3年で乗客2.7倍に

病院開設機に路線再編 中高生需要掘り起こし

人口減少で地方の公共交通が苦境に立たされる中、丹波市内では民間の路線バス利用者数がV字回復している。減便や路線廃止を防ごうと、同市とバス事業者が2019年度から通学定期の購入補助やルートの見直しなどを始め、朝夕の中高生らの需要を掘り起こした。相次ぐ学校統合も逆手に取って遠距離通学を取り込み、20～23年度の3年間で年間の乗客数を約2・7倍に伸ばした。

丹波市内の路線バスは、神姫バス系列の「ウイング神姫」（宍粟市）が運行している。丹波市ふるさと定住促進課によると、23年度（22年10月～23年9月）の延べ乗客数は13万567人。底だった20年度から8万2千人近く増やした＝グラフ。24年度もさらなる上積みを見込む。

日本バス協会の報告などよれば、全国的に地方のバス経営は厳しく、公的支援なしには経営が成り立たない。同社が運行するのは丹波や西播、北播地域。丹波篠山市など自治体がてこ入れに積極的な一部エリアで利用が増えた例はあるが、丹波市ほどの回復は「事業者にとってもうれしい驚き」という。同社の担当者は「過疎指定地域も含む丹波市なら、都心部より利用者の減少幅が大きくて普通」とする。

□ □

同市は19年7月の兵庫県立丹波医療センター（丹波市氷上町石生）開院に伴い、同社などとバス路線再編に着手し、市内の全路線を同センターに接続させた。だが、利用増に最も貢献したのは通院患者ではなく、自転車通学や保護者の送迎をバスに切り替えた中高生だったという。

市が20年に創設した通学定期の購入補助制度により、市内の高校生は1カ月のバス料金の自己負担が上限1万円に。沿線で暮らす生徒を中心に、20～22年度に延べ4万人の乗客を新たに得た。23年度も31人が補助を申請した。

中高生の通学を取り込み、延べ乗客数がV字回復した路線バス＝丹波市柏原町柏原

近年相次ぐ小中学校の統廃合で、徒歩通学ができなくなった生徒が増えたことも影響した。23年に中学校2校が統合した旧山南町域では、バス停の場所や始発の時刻を通学用に改め、半年で延べ4万人の新規乗客を確保した。市内では通学時間帯に「黒字便」も生まれている。

□ □

今年4月からは、4カ月間新たな需要などを調べる社会実験が始まった。市内で唯一、路線バスが走っていない旧市島町域に、26年春の小学校統合を想定した路線を試験的に走らせる。利用が低迷する旧春日町域でも、中高生が登下校に使えるよう鉄道駅へ向かう朝の便を増やしている。

市は路線見直しに加え、小中学校での出張授業や啓発活動などを通じ、自家用車への依存度を下げて公共交通の有効活用を促す「モビリティーマネジメント」に力を入れる。一方で、バス業界全体で言われる運転手不足への対応、補助事業と財政支出のバランスなどの課題も浮かび上がる。

市の担当者は「路線は一度廃止になれば復活は難しい。維持していくためにも、バスの存在感がある今のうちに需要を掘り起こして乗客を増やしたい。官民で取り組んでいきたい」と話している。（那谷享平）

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。